

vivo

水戸芸術館音楽紙[ヴィーヴォ] vol.276

5-6

May & June 2026

特集

02

水戸室内管弦楽団
第117回定期演奏会

06 2026年度の音楽部門企画ラインナップ
08 INFORMATION

©Rikimaru Hotta

水戸芸術館
ART TOWER MITO

水戸室内管弦楽団 第117回定期演奏会 指揮者なしで紡ぐアンサンブル

文：篠田大基



第109回定期演奏会(2022年5月18、19日)より ©大窪道治



第2回定期演奏会(1990年4月18、19日)より
独奏・宗倫匡(ヴァイオリン)・金井信子(ヴィオラ)

第3回ヨーロッパ公演(2008年6月)より
フィレンツェ・テアトロ・コムナレにて ©大窪道治

5月26、27日の水戸室内管弦楽団(MCO)第117回定期演奏会は、現代最高峰のピアニスト、マルタ・アルゲリッチさんとの8度目の共演です。演奏されるベートーヴェン〈ピアノ協奏曲 第1番〉は、初共演となった2017年の第99回定期演奏会でも取り上げられた作品で、以来深められてきた信頼のもと、一層充実したアンサンブルが生まれるはずです。

初共演では小澤征爾さん(第2代水戸芸術館館長・MCO総監督)が指揮をとりましたが、今回は指揮者を置かない形での共演となります。MCOは世界的に活躍する個性豊かな演奏家を集めた室内オーケストラであり、奏者同士が音の直接対話をする「室内楽」的な演奏にこそ、その真価があります。今回はベートーヴェンに加え、ラヴェル〈亡き王女のためのパヴァーヌ〉、チャイコフスキー〈弦楽セレナード〉も、指揮者なしで演奏されます。

MCOは創立以来、指揮者なしでの演奏を活動の重要な柱としてきました。今回の演奏会にちなみ、その歩みを振り返ってみましょう。

MCOのこれまでの117回の定期

演奏会のうち、指揮者を置かない演奏会はじつに3分の1以上を占めます。その最初は、1990年の第1回演奏会のわずか10日後に開かれた第2回定期演奏会でした。「協奏曲の夕べ」と題されたこの回では、安芸晶子さん(ヴァイオリン)、工藤重典さん(フルート)、宮本文昭さん(オーボエ)などの楽団員が代わるがわるのソリストを務め、4つの協奏曲が披露されました。ソリスト級の奏者を揃えたMCOの実力を示すプログラムだったと言えるでしょう。

MCOのデビュー・アルバムも指揮者なしの演奏でした。収録曲は、1993年の第16回定期演奏会で取り上げられたシューベルト〈死と乙女〉(マーラー編曲の弦楽合奏版)とマーラー〈アダージェット〉。その演奏について、吉田秀和さん(初代水戸芸術館館長・MCO総監督)はメンバー一人一人の自発的な表現を評価し、「こんなに類のない際どい演奏でありながら、統一感失われない」と賛辞を送りました。

指揮者なしの演奏でMCOが本領を最大限に発揮したのが、2008年の第3回ヨーロッパ公演でした。参加予定であった小澤征爾さんが体調不良

で急遽降板。渡欧直前の第72回定期演奏会は広上淳一さんが代理で指揮をしたものの、海外まで同行できる指揮者は見つかりませんでした。ツアー中止もやむなしという状況のなか、楽団員の間からは、「自分たちだけでやれる」という力強い声が上がりました。プログラムのメインはベートーヴェン〈交響曲第4番〉。通常は指揮者なしでは考えにくい作品でしたが、MCOは水戸での演奏会の最後の1日を指揮者なしでの演奏とし、さらに渡欧後も練習を重ね、ついには現地紙に「小澤なしでトップに」(*La Nazione*)と称えられる演奏で反響を呼びました。

MCOはその後も、小澤征爾さんをはじめとする名指揮者とのコラボレーションとともに、指揮者なしでの演奏に継続して取り組んでいます。アルゲリッチさんとの協奏曲では、2018年のショスタコーヴィチ第1番、2022年のシューマンに続き、今回が3度目の指揮者なしでの共演となります。指揮者を置かず、それゆえの親密さと緊迫感が織りなすMCOとアルゲリッチさんの稀有なアンサンブルに、ぜひご期待ください。

「懐かしさ」から読み解く 水戸室内管弦楽団第117回定期演奏会

文:角増 柊



「懐かしい」はどこから?

いま、昭和中期(1950~80年代頃)や平成中期(1990~2000年代頃)に流行した文化やデザインや場所などが、現在の10~30代前半の世代を中心にちょっとしたブームを巻き起こしており、「昭和レトロ」「平成レトロ」などと呼ばれています。たとえば、黒電話(レースのカバーつき)が置いてある純喫茶でスタンドグラスを眺めながら、さくらんぼのシロップ漬けに乗った固めのプリンを食べる……なんて場面を想像してください。昔のことを思い出して「懐かしい」と思う方もいらっしゃると思いますが、ちょっと待ってください。この「懐かしい」という気持ちは、その時代を実際に生きて経験した人だからこそ、湧いてくるのではないのでしょうか。生まれたときからインターネットやスマートフォンが普及していた世代でも、先のような純喫茶でのひとときを「懐かしい」と感じられるのは、なぜでしょうか。

ビタースイートな感情

「懐かしい」は、「個人的な懐かしさ」と「歴史的な懐かしさ」の2種類に分類できるそうです。前者は、自らが体験したことや記憶に由来するもので、心理学の分野で多く研究されています。後者は、社会的・文化的な知識から生まれてくるもので、心理学の分野だけでなく、マーケティング戦略など社会学の分野でも多く研究されています。「昭和レトロ」ブームは「歴史的な懐かしさ」になるわけですが、自身が生まれる前の時代や行ったことのない場所を懐かしく思えるというのは、いわば過去という“未体験のもの”への憧れでしょうか。実際に経験した人からすれば「たいしたことはない」「今のほうがよい」と思える過去のことで、現代の知識や文化(映画、音楽、写真など)を通して眺めるからこそ、理想的に映るのかもしれませんが。

「懐かしい」という感情は、ポジティブな気持ちとネガティブな気持ちとが入り混じった複雑なもので、心理学の分野ではよく「ビタースイート」と表現されるそうです。たしかに、たとえば実家のことを思い出してみると、家族でテレビを見ながら笑ったこと、叱られて部屋に閉じこもったこと、天井のシミが妙に怖かったこと……など、いろいろな記憶や感情が呼び起こされます。同時に、これらはもう過去のことなのだという寂しい気持ちも。

まさにビタースイートです。さらに、「懐かしい」という感情をめぐるのは、京都大学などの研究グループが国際的に行った調査研究において、人とのつながりと「懐かしさ」との関連性を示すデータとともに、「懐かしさを感じる度合いが高い人ほど、人とのつながりを広げて深めようとし、親しい友人が多くなる」という研究結果も報告されています。

「懐かしさ」から読み解く3作品

5月26日、27日に開催される水戸室内管弦楽団(MCO)第117回定期演奏会での3作品を、「懐かしさ」をキーワードにして読み解いてみましょう。

まずは、ラヴェル作曲の〈亡き王女のためのパヴァーヌ〉。本作は、まもなく20世紀に突入するという1899年の作品で、作曲者本人がタイトルをつけました。20世紀に入る間際に



ベラスケス作「王女マルガリータ」



カール・トラウゴット・リーデル作
ベートーヴェンの肖像(1801)

的な衝動によって作曲され、真の芸術的価値を失わないものと感じている」「モーツァルトに対する崇敬、彼の様式の意識的模倣であり、その手本に近いものであれば幸である」と述べていることから、本作にたつぷりと込められた、均整のとれた形式美や古典に対する尊敬の念がうかがえます。そもそも「弦楽セレナード」というジャンルは古典派の時代に隆盛し、とりわけモーツァルト

ベートーヴェン作曲〈ピアノ協奏曲第1番〉は、彼がまだまだ“作曲家”として名を馳せるより前、むしろピアニストとして有名だった24歳の頃(1795年3月29日)にウィーン芸術家協会で開催された、ウィーンでのデビューコンサートで自作自演した作品です。彼はウィーンへ留学したとき、同じ建物に住むリヒノフスキー侯爵夫妻と出会い、この出会いがきっかけで邸宅でのサロン演奏会に招かれると、あっという間にウィーンの社交界で有名になりました。ちょうどその頃のウィーンでは毎年「慈善コンサート」が企画されており、その出演者兼作曲者としてベートーヴェンが選ばれたのです。初めての大きなコンサートで万雷の拍手を受けた成功体験が、彼の音楽家としての地位を確固たるものにし、音楽家としての独立を果たす足がかりとなりました。本作を含むベートーヴェンのハ調(短調から長調へ変化する曲を含む)の曲からは、後に作曲した交響曲第5番〈運命〉や弦楽四重奏曲第9番〈ラズモフスキー 第3番〉にみられるような、ある種の力強さや熱狂を感じ取れることができますが、ひょっとしたら、彼自身の脳裏に〈ピアノ協奏曲第1番〉での成功が懐かしい記憶とし

作られたにもかかわらず、タイトル中の「パヴァーヌPavane」というのは、16世紀から17世紀にかけてヨーロッパの宮廷で流行した舞踏やその舞曲の名前です。ラヴェルは、自分が生きている時代の300年以上前に流行した踊りや音楽に想いを馳せていたのでしょうか。「亡き王女のための」の由来については諸説ありますが、スペイン絵画の黄金時代である17世紀の巨匠・ベラスケスが描いた『王女マルガリータ』(ルーブル美術館所蔵)にインスパイアされたという説があります。「懐かしさ」から本作を読み解くならば、ラヴェルの時代の知識や文化を通して眺めた、理想的な古のスペイン宮廷への憧憬を、「パヴァーヌ」という器を通して鮮やかに描き出した作品だといえるでしょう。MCOにとっては、吉田秀和初代館長のお別れ会でも演奏した「懐かしさ」の詰まった作品です。

続いては、チャイコフスキー作曲の〈弦楽セレナード〉です。本人が「内面

の作品が有名です。チャイコフスキーはモーツァルトに対して愛着をもっており、本作を完成させた1880年前後には、〈モーツァルティアーナ〉(「モーツァルト風」の意)や〈管弦楽組曲〉など、古典派時代やバロック時代の音楽に対するオマージュ作品を多く作曲しました。MCOにとっては、記念すべき第1回定期演奏会(指揮:小澤征爾)の締めくくりに演奏した、とても想い出深い1曲です。



水戸室内管弦楽団第99回定期演奏会

©大窪道治



水戸室内管弦楽団第1回定期演奏会

で焼き付いていて、続くこれらの作品にも渦巻く「熱狂」の根源になっていたとしたら——

マルタ・アルゲリッチ氏にとっても、本作は「十八番」のひとつであり、若い頃より様々な指揮者やオーケストラと共演してきました。ジュゼッペ・シノーポリ指揮フィルハーモニア管弦楽団との共演(1985年)や、ハインツ・ワルベルク指揮ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団との共演(1992年)といった音盤も残しており、なによりも、アルゲリッチ氏がわずか8歳だったとき、ブエノスアイレスの劇場で公開デビューを果たした際に演奏した曲の1つが本作でした。自身の演奏活動をたどる「懐かしさ」の詰まった作品といえるのではないでしょうか。MCOにとっては、なによりアルゲリッチ氏との初共演を果たした2017年の第99回定期演奏会で演奏された1曲です。まさに、アルゲリッチ氏と小澤征爾名誉総監督、そしてMCOとの固い絆を象徴

する作品です。

「懐かしさ」から得られるもの

何かを懐かしむ気持ちは、「昔は良かった」と嘆くような後ろ向きの感情でしょうか。たとえば、『万葉集』に収められた小野老(おののおゆ)の有名な一首

あをによし 奈良の都は 咲く花の
にほふがごとく 今盛なり

は、遠く離れた九州・太宰府の地から、奈良の都の華やかさを懐かしんだ作品です。けれども、単に都の様子を描写して嘆きたかったのだとは思えません。かつて見た都のきらびやかな風景の記憶を呼び起こすことで、九州での厳しい任務を乗り越えるための心の支えを得たり、あるいは、そうそう帰ることのできない距離にいる人や物への切なさを噛み締めたり……そんなビター・スイートな感情を見事に表現しているのではないで

しょうか。だからこそ、現代まで受け継がれる名歌なのだと思います。

今回の第117回定期演奏会が、皆様にそんな「懐かしさ」まで味わっていただける佳き演奏会となりますよう。

■公演情報

水戸室内管弦楽団・
別府アルゲリッチ音楽祭共同制作
水戸室内管弦楽団
第117回定期演奏会

2026.5.26(火)27(水)
18:30開場 19:00開演
全席指定 S席¥19,000、A席¥16,500、
B席¥14,000 ※予定枚数終了

●出演
マルタ・アルゲリッチ(ピアノ)

●曲目
ラヴェル:亡き王女のためのパヴァーヌ
チャイコフスキー:弦楽セレナード 作品48
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第1番 八長調
作品15

2026年度の音楽部門 企画ラインナップ



©大窪道治

片山杜秀館長のもとでの2年目のシーズンが始まります。2026年度も水戸芸術館でしか聴けない、あるいは水戸芸術館ならではの数々のコンサートや教育事業をご用意しました。今年度の注目公演や聴きどころについて、ご紹介いたします。

専属楽団の公演など

まず水戸室内管弦楽団(MCO)です。5月の第117回定期演奏会(別府アルゲリッチ音楽祭との共同制作)には8度目の共演となるピアノのマルタ・アルゲリッチさんを、10月の第118回定期演奏会にはヴァイオリンのピンカス・ズーカーマンさんを初めてお迎えします。アルゲリッチさんの十八番の一つであるベートーヴェン〈ピアノ協奏曲第1番〉が聴ける第117回定期演奏会は、すでに完売御礼。一方、第118回定期演奏会は、ズーカーマンさんがベートーヴェンの〈ヴァイオリン協奏曲〉を弾き振る予定です。実は、MCOがこの名曲を取り上げるのは今回が初めてなのですが、メンバーからも深くリスペクトされているズーカーマンさんとの共演がずっと待たれていたような気がします。

7月18日にはヴァイオリンの川崎洋介さんを中心とする「カルテット AT 水戸」が第4回演奏会を開催。昨年多

くのお客様から頂戴した「ベートーヴェン〈ラズモフスキー第1番〉が良かった」という声にお応えし、今回は〈ラズモフスキー第3番〉がプログラミングされました。

「新ダヴィッド同盟」の公演は現時点で未定ですが、中心メンバーであるヴァイオリンの庄司紗矢香さんがチェンバロの鈴木優人さんと共演するという注目企画が2027年1月に計画されています。この企画は、鈴木さんが当館で継続中の「J.S. バッハをとりまく音楽のシリーズ」の特別編として位置づけられる可能性もあります。続報にご期待ください。

武満徹 没後30年

今年は作曲家・武満徹(1930～1996)の没後30年にあたります。それを記念して行う公演が、2026年の音楽部門の大きな目玉企画になることでしょう。

中核となる公演は、9月26日に開催する「武満徹の肖像」です。「現代作曲家の肖像」シリーズは、これまでにベリオ、ラッヘンマン、高橋悠治など20～21世紀の偉大な作曲家たちを独自の視点で紹介してきましたが、今回は満を持して武満徹を取り上げます。

これと対を成すようにして、10月4

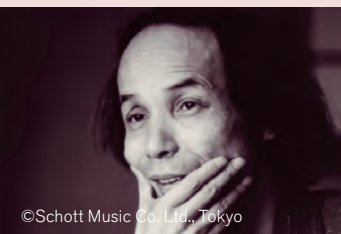
日には「今昔雅楽集 四、秋庭歌一具」を開催します。本企画は、武満徹の唯一の雅楽作品であり、現代雅楽の古典とも言われる〈秋庭歌一具〉を伶楽舎の演奏でお届けするというものです。

片山杜秀館長の講座も新たに企画されました。題して「片山館長と「めぐる」シリーズ」。初年度は武満徹をテーマにご登壇いただくと考えています。武満徹の芸術にあらためて接する機会を、より貴重な、より印象深いものとしていただけたら幸いです。

国内外の一流アーティストによる演奏会

私ども音楽部門が「今聴いてほしい」と願う国内外の一流アーティストによる演奏会も目白押しです。

4月にすでに終えたクリストフ・ブレガルディエン(テノール)&渡邊順生(フォルテピアノ)のほか、10月12日には宮田大(チェロ、無伴奏)、11月8日には内田光子(ピアノ)、11月20日にはレ・ヴァン・フランセ(木管五重奏とピアノ)を招聘します。いずれも大人気のアーティストであるため、チケットの発売日を今後よくご確認の上、お早めにご予約いただくことをおすすめします。



©Schott Music Co. Ltd., Tokyo



©田澤純



©Justin Pumfrey



©Cheryl Mazak



©田澤純



©Laura Stevens



©Marco Borggreve

©東京オペラシティ文化財団

12月15日には豊嶋泰嗣(ヴァイオリン)&クンウー・バイク(ピアノ)のデュオ・リサイタルを開催します。豊嶋泰嗣さんと言えば、水戸芸術館開館の1990年から「水戸カルテット」や「ATMアンサンブル」といった専属楽団のメンバーを務め、小澤征爾前館長からの信頼も厚く、近年ではMCOのコンサートマスターの一人として中核を担う存在です。その豊嶋さんが今年デビュー40周年を迎えるにあたって、韓国を代表するピアノの大家クンウー・バイク氏とデュオを組み、ブラームスのヴァイオリン・ソナタ(全3曲)を取り上げる予定です。

ちょっとお昼にクラシック

昼下がりの時間帯に、本格的なクラシック音楽を低料金でお楽しみいただける「ちょっとお昼にクラシック」シリーズ。今年度は、児玉麻里&児玉桃(ピアノ・デュオ)、塚谷水無子(トイピアノなど鍵盤楽器)、中村静香(ヴァイオリン)の3本を計画しています。

未来を担う子どもたちのために

水戸室内管弦楽団「子どものための音楽会」(水戸市内の全小学5年生ほか対象)、中学生のための音楽

鑑賞会(水戸市内の全中学1年生ほか対象)、幼児のためのパイプオルガン見学会(水戸市内の保育施設の年長ほか対象)などを今年も実施し、合計5,000人以上の子どもたちに、生の音楽のすばらしさをお届けします(一般非公開)。

8月には、〈子ども芸術館〉サマー・フェス2026を美術部門、演劇部門と合同で開催します。とにかく水戸芸術館に来ていただければ、工夫を凝らした絵本や不思議な踊りやきらびやかな音が来場者をにぎやかに取り囲むような、楽しさ満載のフェスになるはず。音楽部門では、浅井美紀さんによる「0歳からのわくわくオルガン・コンサート」のほか、エントランスホールのパイプオルガンを使った新企画も考えています。

さらに、MCOメンバーによる吹奏楽等のセミナー、室住素子さんが講師を務める「市民のためのオルガン講座」なども継続して実施してまいります。

茨城の若手演奏家の登竜門である「茨城の名手・名歌手たち」、池辺晋一郎氏の企画とトークによる「クリスマス・プレゼント・コンサート」、広場で盛大に開催する「水戸の街に響

け!300人の《第九》」のほか、「茨城の演奏家による演奏会企画」、佐川文庫など市内の文化施設と連携した企画など、本記事ではご紹介しきれない催しもたくさんございます。

ぜひ今後も本誌や各公演のチラシにご注目ください。今年度も多くのお客様とともに、水戸芸術館の催事を盛り上げていくことができました、幸いに存じます。

芸術監督 関根哲也



©Akira Muto



©中倉はる樹



©JINSOO LEE



©Carolien Sikken



©Warner Classics

INFORMATION

※以下は4月1日現在の情報です。公演等に関する最新情報は当館ウェブサイトにてご確認ください。

Lucky FM 茨城放送

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」

毎週日曜 7:30～8:00

パーソナリティ:石井哲也アナウンサー

出演:音楽部門学芸員(月替わり)

学芸員がおおすすめの曲をご紹介します、クラシックの魅力をお届けする番組です。

▶Lucky FM ウェブサイト <https://lucky-ibaraki.com/>

▶radiko(ラジコ)でもお聴きいただけます <https://radiko.jp/>



好評
放送中!

チケット・インフォメーション

《5.30(土)発売予定》

■0歳からのわくわくオルガン・コンサート

8.9(日)11:00

■ちょっとお昼にクラシック

塚谷水無子(鍵盤楽器)

9.12(土)13:30

■武満徹の肖像～武満徹 没後30年記念企画～

9.26(土)時間未定

■今昔雅楽集 四、秋庭歌一具 ～武満徹 没後30年記念企画～

10.4(日)時間未定

《6.27(土)発売予定》

■宮田大 チェロ・リサイタル

10.12(月・祝)15:00

■水戸室内管弦楽団

第118回定期演奏会

10.23(金)19:00、24(土)15:00

5月・6月の主な音楽イベント

コンサートホールATMほか

◆アルモニアRosa 5th Concert

5.10(日)15:00

料金[全席自由]一般¥2,000/大学生以下¥1,000

◆水戸室内管弦楽団 第117回定期演奏会

5.26(火)、27(水)両日19:00 予定枚数終了

料金[全席指定]S席¥19,000/A席¥16,500/B席¥14,000

◆箏、ピアノ、尺八、ギター

～カルテットで生み出す、未来へ繋がるコンサート～

6.28(日)15:00

料金[全席自由]一般¥4,500(前売¥4,000)/

学生¥2,500(前売¥2,000)

エントランスホール

◆バイブオルガン・ブロムナード・コンサート(入場無料/事前予約不要)

□5.3(日)13:00～13:45 龍田優美子 ★ゴールデンウィークスペシャル

□5.17(日)12:00～12:30/13:30～14:00 箭内明日香

□6.13(土)11:00～11:30/12:30～13:00 田中エミ

□6.21(日)12:00～12:30/13:30～14:00 高田のぞみ

茨城の演奏家による演奏会企画

2027年度に開催する演奏会企画を募集いたします。

【対象】茨城県にゆかりのある演奏家や県内を中心に活動している演奏団体

【申込期間】5.6(水・振休)～6.5(金)[当日必着]

※詳しくは当館Webサイトをご確認ください。

演劇・美術のイチオシ企画!

ACM劇場

◆ゆうくんとマットさんのむかしばなし

「さんまのおふだ」

5.2(土)～10(日)各日11:00

脚本・構成・演出:Ukm3

出演:ゆうくんとマットさん(大内真智・小林

祐介)、堀口理恵、木村隆之

料金:[全席指定]大人¥3,200、こども(18

才以下)¥1,000

※お得な親子チケットもあります。詳しくは当館Webサイト(ACM劇場)をご確認ください。



現代美術ギャラリー

◆第57回水戸市芸術祭 美術展覧会

第1期:6.2(火)～6.12(金)

第2期:6.17(水)～6.28(日)

[休館日]月曜日

[開場時間]9:30～18:00(入場は

17:30まで)

[入場料]無料



2026年4月7日発行(第276号)

編集:水戸芸術館音楽部門 | 中村 晃、関根哲也、篠田大基、角増 柊、根本彩生、高木春佳、渡辺有美

発行:(公財)水戸市芸術振興財団 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8118(音楽部門)

Tel.029-231-8000(チケット予約センター 9:30～18:00・月曜休館) <https://www.arttowermito.or.jp/>

デザイン:K5 ART DESIGN OFFICE. 印刷製本:山三印刷株式会社



■編集後記

私は、花粉症ではない。毎年春になると、目がかゆくなるけれど、花粉症ではない。薄い鼻水が垂れてくるけれど、花粉症ではない。抗ヒスタミン薬を服用すると楽になるけれど、花粉症ではない。決して、花粉症ではない。断じて、花粉症ではない……ハクション!(角)

2025年度「市民のためのオルガン講座」も無事に発表会を終えることができました。受講生の皆さんの個性や約半年間の努力と成長が伝わるコンサートとなりました。2026年度の募集も始まり、今年はどういう受講生の皆様にお会いできるのか、今から楽しみです。(根)

最近、当館の広場でキジトラ猫をよく見かけます。猫も犬も大好きな私ですが、猫を見かけるとつい追いかけてしまうため好かれず、実家の猫にも突然猫パンチをくらいます。どうすれば冷静でいられるのでしょうか…(笑)(春)

春になると、桜の下でコーヒーを片手にぼーっとしたい気持ちになります。何かのついではなく、それを目的に外出したい程です。千波湖や笠間の芸術の森公園に行くことが多いですが、今年は新しいぼーっとスポットを見つけないあ。(辺)

「水戸芸術館 presents みんなのクラシック」、5月の放送を担当させていただきます。5月は水戸室内管弦楽団の過去の定期演奏会の録音アーカイブから、指揮者なしによる名演の数々をご紹介します。CD化されていない音源も多数かける予定です。どうぞお楽しみに!(篠)

春は蛙の季節。水辺でじっとして幸せそうなヒキガエルをよく見る。ある日、上空から突如巨大な翼の猫が急降下してきて、瞬く間に太った蛙を両足でつかみ飛び去った。息を呑む。そしてふと、草野心平の「る」ばかりの詩が心の中で低く響いた。(て)